

介護旅行の参加者増える

NHKゆうどきネットワーク 2013年1月28日

2013年1月28日
NHK総合TV

介護旅行者はここ10年で参加者が1.5倍に増えている！
個人、家族、団体旅行とさまざま・・・
今まで家に閉じこもっていた人々が旅行を楽しめる時代がきた。現在、介護旅行扱い業者は24社。

今後30年がヤマ場といわれる超高齢社会を迎える日本。
介護旅行のように、現場のニーズをくみ取ったさまざまなサービスが、ベンチャーや中小企業から生まれ、ビジネスモデルを構築しはじめている。

箱根での初詣の日帰りバス旅行(参加費1.3万円)では17人が参加。13人が70歳以上。車イス可。
バスには車イスのまま乗り込める。
ヘルパー2人、看護師1人が同行。
片道2時間の行程では移動中のバスのなかで体操をして身体の筋肉をほぐす。箱根神社は車イスでも初詣ができるようになっている。
いままで旅行が出来なかった車イス高齢者が、2年ぶりにバス旅行に参加し感謝していた。

伊豆半島の東伊豆町では介護者を大歓迎！
老舗ホテルは車椅子専用のエレベーターを設置したり、バリアフリー環境を整えている。
車椅子から簡単に風呂に入れるように専門ヘルパーのサポートもある。
この老舗ホテルでは車椅子の観光客が2倍に増えているという。



介護旅行とは

トラベルヘルパーが同行し、ご高齢の方や、お身体の不自由な方が行きたいところに行く・やりたいことをやるお客様の希望、夢を叶える旅のことです♪

お体に不安があるけど旅に出たい。諦めていた海外旅行に挑戦したい・・・その夢を、一緒に実現します。

笑顔にあえる、感動にあえる。
「行きたい旅」は「もう行ける旅」です。
あきらめないでください、旅の夢。

エス・ピー・アイ(SPI)代表取締役の篠塚恭一は4月、経済産業省の「“日本の未来”応援会議～小さな企業が日本を変える」(未来会議)で、こう訴え掛けた。中小企業の潜在力を探り出し、支援する目的の未来会議で篠塚がこう強調したのは、「もはや政治家や役人がリードする時代ではない。答えは現場にしかない。現場のニーズをビジネスに発展させるためにこそ、日本の頭脳は必要とされている」と考えているためだ。

■国が後押し、各界から注目も

篠塚は17年かけて、「介護旅行」を育ててきた。介護旅行は、要介護者など向けの旅行サービスで、介護の技術と旅行の知識を持つ援助者が支える。これにより、難しいとされていた要介護者の旅行の可能性が広がる。昨年、SPIが取り扱った介護旅行だけで、利用件数は年間500件。篠塚が理事長を務めるNPO法人日本トラベルヘルパー協会が認定する「トラベルヘルパー(外出支援専門員)」も、SPIに登録しているだけで700人に達する。

介護旅行は、大手旅行会社や異業種からの参入など、SPI以外でも広がりを見せている。例えば、篠塚がコンサルティングに入った佐川急便の子会社「佐川アドバンス」が手掛ける介護旅行事業は昨年、実質1年目で年間取り扱い件数が100件に達した。好調な滑り出しを受け、全国6拠点(札幌、仙台、東京、名古屋、大阪、福岡)でスタッフを3倍にし、一気に事業強化することが決まった。

ただ、篠塚は「ようやく介護業界の人たちに認知されつつあるが、一般の人の認知度は1、2割くらいだろう」と指摘する。ヘルスケア産業の育成に注力する経産省が後押しし、介護事業者や旅行会社だけでなく、超高齢社会での事業領域拡大を目指して自動車メーカー、住宅メーカーなども注目し始めている介護旅行だが、認知度という意味ではまだまだ課題があるのが実情のようだ。

参加の条件

- ①客自身が旅行にいきたいという希望を持ち、その意思確認ができる
- ②家族(あるいはそれに代わる日常生活がわかる方)が賛成している。
- ③主治医・ケアマネージャーなど医療・介護の専門家の許可がある。